

SBJ

vol. 31

2014年12月17日発行

碩学舎ビジネス・ジャーナル
Sekigakusha Business Journal



<閉ざされた社会>と <開かれた社会> —変化の認識論

小坂井 敏晶 (パリ第八大学 心理学部 准教授)

<閉ざされた社会>と <開かれた社会> —変化の認識論^{★1}

★1 本稿は、2014年7月24日（木）流通科学大学 大阪オフィスにて開催された日本マーケティング学会 ソーシャル・ビジネス研究会と碩学舎研究会との共催による研究報告会の講演録より作成しています。

小坂井 敏晶 パリ第八大学 心理学部 准教授

はじめに

今日は「〈閉ざされた社会〉と〈開かれた社会〉—変化の認識論」というテーマを選びました。開かれた社会というスローガンには誰でも賛成します。しかし我々はその意味を分かっているでしょうか。開かれた社会というのは、外部から異質な要素をもたらされなくても、社会内部で異質な要素、異端者が生み出され、その異端者が社会を壊していく、社会を変えていくということです。開かれた社会、それはシステムを壊す攪乱要因をシステム自体が生み出す社会です。

何でもないようですが、実はこの考えを突き詰めていくと、困ったことが出てきます。普遍的価値が存在しないということが、ひとつなのですが、もうひとつは、人間の未来は人間自身が決められないという結論が導かれます。

今日はそういう話をして、マーケティング専門家の方がやっていらっしゃる仕事は役に立たないと申し上げようかと思っっています（笑）。しかし私は机上の空論をやっているだけです。実際には違っているかも知れませんが、実際に生きた現場で研究していらっしゃる方々から批判を頂いて勉強しようと思っただけです。

まず、私の先生でもある、社会心理学者のセルジユ・モスコヴィツシというフ

ランス人と、古典ですが同じフランスの社会学者エミール・デュルケム、それからオーストリア出身の経済学者フリードリヒ・フォン・ハイエクの3人に依拠しながら、社会の変化について考えていきたいと思えます。

初めに、勘違いがないように申し上げます。私がおきますと、私は開かれた社会が望ましいと言いたいわけではありません。客観的な事実として、社会は開かれたシステムを成していると主張するのです。例えばニュートンの万有引力に対して、私たちは良いとか悪いとか言いません。「ニュートンが万有引力を発明したから、昨日財布を落としてしまった」とか「ニュートンって奴は太い野郎だ」とかは言わないわけです。同じように、我々が望むと望まざるとにかかわらず、社会は開かれたシステムを成す。こういう話です。

3つのトピック

「変化をどう説明するか」、「歴史の原動力」、「べき論の陥穽」という3つの部分で今日の話を構成しました。第1に、変化をどう説明するか。社会の変化を説明するためには、少なくとも2つの要素、2つの段階があると思えます。まず新しい要素が生まれなければ、イノベーションがなければ、そもそも社会は

変わっていきません。しかし、イノベーションが生まれても、それが社会に伝播していかなければ、社会はまったく変わらないわけです。この2段階です。順序が逆になりますが、まずは2段階目の、少数派の意見が社会にどのように浸透していくかという点を簡単に見ます。

その次に、1段階目のそもそもの新しい価値やアイデアはどうして生まれるのか、異端者がどうして生まれるのかを、エミール・デュルケムの犯罪論を基にお話しします。システムを壊す要素が必ず社会に生まれてくるのは何故なのか。以上が第1のトピックです。

第2のトピックは歴史の変遷に関するものです。もし社会変化を法則で捉えられるならば、未来は既に決まっていることになり、歴史は消え失せてしまいます。我々は普通、未来はどうなるか分らないという了解をします。では、それはなぜか。ここで持ち出されるのが人間の自由です。人間が意志を持って、社会を構築しようとする、したがって歴史は最初から決定されていない。こう理解します。しかし残念ながら、社会心理学、認知科学、あるいは脳生理学などを参照しますと、とてもそういう考えは無理なのです。人間の意志によって行動が起きるのではないし、人間の自由も存在しない。これが専門家の考えで、私もそう思

います。その辺りをお話して、皆さんのご批判を頂きたいと思えます。

第3のトピックは、「べき論」の陥穽です。社会を開放システムとして理解するとは、どういうことか。それは、人間の予想を超えて社会が変遷するという意味です。つまり、人間の未来は人間自身にも築けないのではないか。こういう大きな問題が出てきます。全ての「べき論」、つまり規範論は、人間の未来構築に人間自身が意識的に貢献できるという前提に立ちます。そうでなければ、「べき論」を言っても仕方がない。したがって、「べき論」には原理的な問題があるのではないか。こういう問いに続きます。



ハイエクに依拠してお話ししますが、集団現象は人間の意志からずれて自律運動をします。言語にしても、宗教にしても、道徳にしても人間が作っているには違いありませんが、特定の個人がつくったものでもないし、意識的につくったものでもありません。社会の集団現象は人間から遊離していく。そうすると、「べき論」は無意味ではないか。これが一つ目の問題として出てきます。

それだけではない。もしかしたら「べき論」は現実の姿を隠蔽して、実は社会を閉じるためのイデオロギーとして機能するのではないか。「地獄への道は善意で敷き詰められている」という有名なことわざがあります。我々が良かれと思っただけで、望んだものとは違う結果が生み出される。

今日は具体例として学校制度の話です。貧富にかかわらず、みんなに教育機会を与えて、全ての子どもや若者に均等な教育機会さえ与えれば、公正な社会が築ける。日教組などもこう考えてきました。しかし、実はそのような信念こそが格差構造や階級構造を再生産してしまうというパラドックスについて、今日はお話しします。

科学でも哲学でも最も大切なのは、常識と距離を取ることです。しかし、皆さ

んご存じのように、それが一番難しい。大切なのは答えよりも問いです。思考が堂々巡りして閉塞状態に陥る時、考え方を根本から変える必要があります。問いの立て方自体が間違っている。ビジネスの世界でもよく知られていることですね。

授業で私がよくする、こんな話があります。暗い夜道を散歩していると、街灯の下で何か探している人がいる。「何かお困りですか」と尋ねると、「鍵を落としてしまっただけです。鍵がないと家に入れない。さっきから一生懸命探しているのですが、見つからないので困っています」と言います。「ああ、それはお困りですね。お手伝いしましょう」と一緒に探し始めますが、10分たっても20分たっても見つからない。それほど広い場所ではないので、おかしいと思って、「ここで落したのは確かですか」と聞くと、「落したのは公園のもっと向こうです。だけど、あそこは街灯がないので何も見えない。だからこの街灯の光の下で探しているのです」と。

これは単なる笑い話ではありません。街灯の光は常識の喩えです。我々は探すべきところを探さずに、見えやすいからといって常識の枠の中で考えてしまっています。この常識の枠をどうやって壊すか。それが大切です。今日の話もできる

だけ先入観を排して、距離を取って聞いていただけたら、よろしいと思います。

一・変化をどう説明するか

異端の考え方が社会に伝播する過程

では第1のトピック、変化をどう説明するかです。まずは、異端の考えが社会に伝播していく過程を確認します。その後で、そもそも異端者がどうして社会に生まれるかという話をいたします。

社会心理学では、1960年ごろまで影響は一つのモデルで考えられていました。ホメオスタシス (homeostasis) モデルです。攪乱要素が生まれると、状態を元に戻すようにネガティブ・フィードバックが起こる。逸脱する少数派が多数派に影響されることによって、つまり上から下へと影響が流れることによって、社会システムは安定するという考えでした。専門家の意見だから自分で吟味する必要はないとか、あの偉い先生が言うのだからと正しに決まってると思ったり、あるいは、本当はそうでないと思うけれども、反対すると虐められるから、多数派に迎合する、長いものには巻かれるというのが我々の常です。

社会の攪乱要素は多数派に吸収されて、社会秩序が維持されるというモデルです。ほとんどの心理学理論はこのタイプで、フロイトの精神分析もそうです。

何か異常が起こると元の状態に戻そうとする。防衛反応もそうです。攪乱の要素が生まれると、それを排除する負のフィードバックが生まれる。サーモスタットや体温調節なども同じ機構です。暑いと汗が出て、気化熱が体温を奪って体温が下がる。あまり下がると寒くなりますから、今度は皮膚が収縮して体温が逃げないようになります。こういう反応はどれもホメオスタシスです。

セルジュ・モスコヴィツシ

ところが1970年代になりますと、このホメオスタシス・モデルでは説明がつかない。こう言い出した人がいます。セルジュ・モスコヴィツシという私の先生です。1970年代になって、彼は常識的発想に異を唱えました。社会秩序の維持は今までの理論で説明できる。しかし、変化はどう説明したらいいのか。歴史を見れば明らかで、世界はどんどん変わっていくわけです。どうやって説明するのか。

影響は多数派から少数派に流れる。常識にはこう考えます。では少数派はどうなるか。少数派には2つしか道がない。一つは、多数派に迎合して多数派の言うとおりにする。しかしそれでは多数派の考えは変わりません。したがって社会の支配的価値は変わりません。もう一つ

は、多数派の考えを拒否して孤立する。しかしそれでは少数派の考えが社会の中に浸透していきませんから、社会は変わらない。だからどちらにせよ、社会の変化は説明できません。

変化を説明する努力はホメオスタシス・モデルの枠内でもなされてきました。最も有名なものは、「上からの改革」という考え方です。集団のリーダーは他の人から信頼されている、あるいは権力を持っている。したがって集団の考え方から少々ずれてもメンバーが付いてきます。あまり変なことを言うと反乱が起きますが、ある程度までは集団の考えからずれて、リーダーがイノベーションを起こせると考えるわけです。

集団の効率や機能が低下する時、集団のリーダーが率先してグループの規範から逸脱して、新しい考えを導入する。そうすれば、歴史の変化を説明できる。こう考えたわけです。

歴史的事実には合わない

この説明に対してモスコヴィツシは、それはおかしい、少なくとも3つの問題があると言います。まず、そのような発想は歴史事実には合わない。例えばキリスト、あるいはガリレイでもいいし、フロイトでもいいのですが、真に革新的な思想・価値観は常に社会規範に逆らっ

て伝播してきました。彼らは数の上でも少数派ですし、威信にも権力にも欠けていた。彼らは当時の社会から虐待を受けました。キリストは磔（はりつけ）になつて殺されました。ガリレイも宗教裁判にかけられて大変な目に遭いました。フロイトは性倒錯者のレッテルを貼られて、めっちゃくちゃなことを言われました。そういう被害や虐待を受けながら、自らの信念を説いてきたのです。

あるいは1960年代から吹き荒れた黒人解放運動や女性解放運動（フェミニズム）、性革命を取りましよう。1970年代に避妊ピルがヨーロッパで認可されたり、妊娠中絶がヨーロッパの幾つかの国で認められました。女性は数が男性より多いぐらいですが、権力を持たないという意味では少数派です。このように少数派が世界を変えていきました。世界の根本的な社会変動は、上からではなくて下からやって来る。だから、先ほどの「上からの変革」というモデルでは本当の社会変革は捉えられない。これがモスコヴィツシの1番目の反論です。

変革の動機が多数派にない

2番目の問題に移りましょう。変革の動機がそもそも多数派にあるだろうか。自らの権威や権力の依って立つ基盤を崩

してまで、なぜ多数派がシステムを壊すのか。社会のために自己を犠牲にする指導者もいます。しかし現実には自分の地位を守るために、システムを維持しようとするのが普通です。北朝鮮でもそうですし、日本の政治家も同じです。自分の地位、自分の権力、自分の利益を守ろうとするのが人間の常です。したがって、彼らがなぜシステムを壊すのか。ビル・ゲイツが資本主義を壊して共産主義革命を起こそうなんて、なぜ考えるかということ。ですから、先ほどの「上からの改革」モデルでは、この問いに答えられません。多数派には変革する動機がありません。

上位者が変わらない

さらに3番目に、「上からの改革」という考えでは、結局、変化の前と後で上位にいる人が変わらない。リーダーはいつまでもリーダーです。ところが実際には、社会変動が激しくて深部に達するほど、社会の上位を占める者は、変革前と後で変わります。フランス革命では貴族がブルジョワジーによって打倒されました。ロシア革命では貴族がプロレタリアートによって、レーニンによって打倒されました。このように、本当の変革では必ず上下関係が変わります。主役が交代します。それは科学や学問の世界で

も、芸術の世界でもそうです。新しい潮流が生まれれば、以前の潮流の人は背後に退きます。だから、「上からの改革」という考えではおかしい。モスコヴィツシはこう説きました。

官僚の世界でも、民間企業でも学問界でもそうですが、下っ端では何もできません。ですから権力を握るまでは我慢して組織の論理に従います。頂点に立った暁には、腐敗した組織を変えようとか、年寄りを追い出して学問界を変えようとか、こう若者は志します。しかし、このよう

な妥協的な姿勢では結局、支配構造を崩せず、ミイラ取りがミイラになるだけです。世界を変えようと思って官僚になる人もいますが、結局は霞が関の論理に取り込まれて、同じことしかできません。それは、変革を目指す論理自体に矛盾があるからです。

少数派による影響の可能性を認めなければ、影響研究は行き詰まりを打破できない、変化を説明できないことが、モスコヴィツシの提言によって分かってきました。本当の真の社会変革は、上から下へ流れるのではなく、少数派、異端者の力によってのみ可能だと、モスコヴィツシが言ったわけです。彼は実証研究によっても、この考えの正しさを示しました。

今日は影響プロセスを説明する時間は

ありませんので、少数派影響のタイプについて一っだけ例示します。少数派は多数派が影響する場合とかなり違う影響の仕方があります。これはフランスの実例で、フランスのある学者が書いていることです。ある朝食事をしながら非常に良いアイデアが浮かび、興奮します。研究所に行つて同僚を集めて、「いやあ、すごいアイデアが見つかった」と自信を持って話し出す。ところが同僚の反応は悪い。おかしいなと思つて、ついに「このアイデアはいいだらう」と尋ねると、彼の弟子が、「しかし、それは私の博士論文に書いてあることですよ」と言ったのです。「そんなばかなことはない。朝、俺が見つけたばかりのアイデアだ」と先生はびっくりする。論より証拠ということで、博士論文を調べたら、アイデアがそのまま書いてある。それだけではありません。余白に「このアイデアは間違っている」と自分で書いているのです。

実は一年半ぐらい前に博士論文の審査をした。弟子は少数派ですから、少数派の意見を、その時はおかしいといったん退けているわけです。ところが、そのことを意識はしていなくとも、本当に忘れていたのではなく、その情報が頭のどこかに残っていた。しかし誰から聞いたかは忘れていた。やがて一年半たって時限

爆弾みたいに、あるいは一定の潜伏期間を経て病気になるウイルスみたいに、自分のアイデアだと錯覚する。少数派の影響はこのように間接的に、そして無意識的な形を取つて現れてきます。普通は気が付かないのですが、少数派も実は影響するので。

キリスト教の布教もそうです。ナザレのイエスというユダヤ人がいて、彼はローマ帝国に反抗する哲学を説いたわけですが、キリスト自身は磔にされて殺されますが、彼の考えは死なず、その後いろいろな土地に浸透していき、ついにローマ皇帝をも改宗させる。大衆を導いてヨーロッパ世界、南北アメリカと伝播していった。これが少数派影響です。



ホメオスタシス・モデルでは、先ほど

言いましたように、攪乱要素が生まれた時、つまりシステムにとっての異質性が、排除されるべき否定的要因としてしか捉えられない。ですから、閉鎖されたシステムとして人間や社会が了解されている。規範から逸脱する少数派・異端者はシステムにとって邪魔者ですから、多数派に吸収されるか、社会から排除される。そういう存在としか考えられていません。社会は平衡システムとして、自己完結するシステムとして、内部に生ずる攪乱要素を排除する方向にシステムが動く。ですから、システム破壊に至る論理はそこから出てこない。

それに対してモスコヴィツシの考えでは、開かれたシステムとして社会を捉えて、システムの論理だけでは正否を決定できない要素が必ずシステムの中に生まれてきます。攪乱要素が社会の既存の規範に吸収されないで、社会の構造を壊していく。こう主張したわけです。

異端者はなぜ生まれるのか

ここまででは、異端者がいた時に、その異端者の考えがどのように社会に伝播するかという話でした。しかし、そもそも異端者はどうして生まれるのか。新しいアイデアはどこから生まれてくるのか。次はデュルケムを参照しながら、こ

の点についてお話しします。

彼はたくさん本を書いています、その中に犯罪論を扱った研究があります。犯罪とは何か、悪とは何かについて、彼はこう書いています。少し難しい文章ですが、読んでみます。

殺すなかれという命令を破る時、私の行為をいくら分析しても、それ自体の中に非難や罰を生む要因は見つけられない。行為とその結果「非難や罰」は無関係だ。殺人という観念から非難や辱めを演繹的に取り出すことはできない。「……」処罰は行為内容から結果するのではなく、既存の規則を遵守しないことの帰結だ。つまり過去にすでに定められた規則が存在し、行為がこの規則に対する反逆であるために処罰が引き起こされるのである。「……」禁止行為をしないよう我々が余儀なくされるのは、単に規則が我々に対して当該行為を禁ずるからにすぎない (Durkheim, E. (1924/1996). *Sociologie et philosophie*, PUF, p. 60-62)。

つまりトートロジーだと言っているのです。行為が正しいかどうかは、社会的に決まる、歴史的に決まる。価値観、犯

罪、善悪の価値観も社会がつくる、歴史がつくるというわけです。

美男・美女の基準もそうです。美男・美女の顔を眺めていても、どうしてその人が美しいのか分かりません。顔の客観的な様子からでは、美しさの原因は分からない。社会でみんなが生きる中で、相互作用を通して価値が生まれてきます。美意識も生まれてきます。たまたまその美意識に合致した顔の人は美しいと言われるだけです。ですから、レオナルド・ダ・ヴィンチやいろいろな人が、どうして我々はこういうものが美しいと思うのかといういろいろな検討をしましたが、結局分からなかったのは、美に理由がないからです。価値は社会的に、歴史的にできてるからです。たまたま、その顔が基準に合っている人が、美しいと言われるだけのことです。

善悪も同じです。悪い行為だから非難されるのではない。逆に、我々が非難する行為が悪と呼ばれる。どのような条件においても殺人を禁止する社会は、今までに存在しませんでしたし、今も存在しません。日本でも死刑という制度があります。死刑制度は、ある条件においては人を殺して良いし、殺さなければいけないという命令です。あるいは江戸時代には仇討という制度がありました。親の仇を討つ。これも自由ではありません。

侍が「お父さんが殺されたけれども、まあいいや」というわけにはいかない。やはり殺さなければいけません。自分が殺される危険があっても、敵を殺さなければいけないのです。そういう社会の掟です。また、人身御供なんていうのもありました。マフィアの復讐もそうです。こういうことは自由にならない。殺人のよいうな行為であっても、全ての条件において禁止する国や社会はありません。社会とともに規範は変わっていきます。禁止は社会の中で必ず現れます。しかし、どういう禁止が現れるかは分からない。

例えば、どの社会にも普遍的にあると言われるインセスト・タブー（近親相姦タブー）。この慣習を説明する理論はいろいろあつて、フロイトのエディプス・コンプレックスを基にした説明もあるし、内婚を避けるというレヴィ・ストロースの説明もあります。しかし、これも実はだんだんとタブーでなくなってきました。近親相姦は嫌だと感じる人がほとんどなのですが、日本では法律上、近親相姦は禁止されていません。成人の同意による近親相姦は合法です。私が母親や父親とセックスしても、それは自由です。したくないですが、自由です。それは日本もそうですし、フランスもそうですし、イスラエルも、ブラジルも、イタリアも、ベルギーも、いろいろな国で合

法です。

ところが、合法でない国もあります。大体アングロ・サクソン諸国です。オーストラリアもそうですし、確かニュージーランドもそうですし、イギリスもアメリカ合衆国もそうです。アメリカ合衆国は州によっては50年ぐらいの懲役刑に処せられます。ドイツでは今まで禁止でしたが、最近合法化されました。

この規定がだんだんと崩れてくるかもしれません。同性愛者もイギリスでは少し前まで投獄されていました。バーナー・ショーなんかは投獄されて2年ぐらい刑務所に入っていました。ところが今は情勢が変わりました。アメリカ合衆国には今も同性愛を禁止している州がありますが、だんだんと変わってきています。ですから、いろいろなものが変わっていくと思います。

変わらないものとしては、多分ヒエラルキーがなくならないということぐらいで、おそらく全て変わってゆくと思います。禁止は必ずあります。だけど、どのような禁止が生まれるかは分かりませぬ。

共同体が成立すれば、規範、ルールが必ず生まれる。社会メンバー全員が同じ価値観を持つのではない以上、異質性が必ず感じられます。私たちは独創性（オリジナリティ）を評価しますが、オリジ

ナリティは客観的にどうということかというのと、みんなと違うということです。みんなと同じではオリジナリティではないですから、異端なわけです。オリジナリティは異端ですが、肯定的に捉えられます。犯罪は異端ですが、否定的に捉えられます。そこが違うだけです。

デュルケムは、両者は本質的に同じだと言います。つまり、オリジナリティと犯罪は内容が違うのではなく、その社会の価値観において、たまたまポジティブに捉えられるか、ネガティブに捉えられるかの違いであって、両方とも多様性の結果である。

醜酔と腐敗という言葉があります。両方とも化学的には同じ現象なのですが、人間にとって都合のいい場合は醜酔と言います、都合が悪い場合は腐敗と言います。日本滞在中、東京にいますが、ねばねばした腐った豆を食べる習慣があります。納豆です。京都や大阪の人は、ああいう野蛮な物はお食べにならないようですが、野蛮人の住む関東では食べます。これも文化によって、腐敗と醜酔の境目がかなり違う例です。

あるいは、私は日本で1回だけ食べて驚いたものがあります。クサヤという乾物です。ものすごい匂いがする、考えるのも恐ろしいような、身の毛もよだつ物を食べさせられたことがあります。この

ような物を食べたいと言う人が地球にいるのかと驚いたほどです。

私はパリに住んでいます。フランスでも腐った物を食べる習慣があります。チーズです。皆さんもこの頃食べるようになりまして、私が初めてフランスに行った時に与えられたチーズは、ロックフォールという青かびのチーズです。これにはびっくりしました。このような物を人間が食べられるとは思いませんでした。今では大好きで、赤ワインに合いますから、おいしいですが、当時はびっくりしました。あとスウェーデンにシュールストレミングという世界一臭い食べ物があります。ニシンの腐った缶詰ですが、クサヤの干物なんか目じゃないような大変な食べ物があります。

このように、腐敗と醜酔、食べられる、食べられないというのは文化によって決まっています。それも先ほど話したように、社会の中で決まった価値観によって、これはいい、これはよくないと決まるだけのこと。オリジナリティと犯罪の違いも同じです。

もう少し我々の視野を広げると、生物の種によって境界が異なる。人間には食べられない物でも、犬や猫だったら食べられたり、ウジやハエだったら食べられる物もあります。一つのシステムの中で、一つのニッチというか、一つの生態

系の中で、あるいは社会の中で良いとか悪いとか言われるのであって、それらの環境を離れて絶対的な意味で良いとか悪いとかは言えません。悪とは、平均的価値から逸脱する行為の表現だ。こういうことをデュルケムは言ったわけです。

もし同じ価値観、同じ規範を全員が守るならば、みんな同じことを考えているわけで、異質性が全くないので、社会は変化しません。先ほど言いましたように、異質性がだんだんと伝播して社会が変わるわけですが、それが不可能になります。ですから、いつまでも同じ価値観が続く、歴史のない社会、いつまでもみんなが同じ考えをする社会です。つまり、犯罪のない社会は原理的にあり得ない。悪の存在しない社会とは、全てのメンバーが同じ価値観に染まって、同じ行動を取る全体主義社会です。犯罪のない社会とは、ユートピアどころか、ジョージ・オーウェル『1984年』に描かれるような、人間の精神が完全に圧殺される世界です。

逸脱する少数派が社会に受け入れられるか拒否されるかは、その主張内容からは決まりません。何が正しいかは結果論です。ガンジーやキリストが影響したと言うと、社会が良い方向に進んでいると我々は思いますし、ヒトラーやスターリンは悪いと考えられている。しかし、ガ

ンジーもキリストも社会に反抗する異端者、反逆者でした。キリスト教はローマ帝国の規範、規則に違反しました。ガンジーは、イギリスの支配構造に対して国旗を翻した悪いやつです。それを我々は今日、良いと捉えます。

スターリンやヒトラーは、その当時、国民の圧倒的多数に支持されました。しかし今日では、間違っていたと思われる。これは結果論なのです。社会を開かれたシステムとして理解するというのは、こういうことです。価値に根拠はなく、価値は社会がつくる。だいぶ危険なことを言っていますか。もっと危険なことを言いますよ(笑)。

初めに断りましたように、開かれた社会が望ましいと言うものではありません。我々が好むと好まざるとにかかわらず、否応なしに社会は未来に開けている。社会を閉じることはできません。

短期的にならば、閉じることが可能です。短い間ならば、社会が変わらないようにできます。異端者を全部殺せばいいのです。ポルポトは異端者を大量に殺しました。あるいは、先ほどのジョージ・オーウェルの『1984年』と同じように、秘密エージェントをたくさんばらまいて、思想を検査し、悪い奴やおかしなことを言う奴はみんな拷問して、洗脳するか殺せば、社会に悪はなくなつて、み

んな同じ考えになります。

ところが、そのためには凄いエネルギーが要ります。秘密エージェントを配置するだけでも大変ですが、その秘密エージェントも悪いことをしますから、また彼らを監視する人も要ります。だから、社会として大変な無駄をしないと、社会は変化してしまいます。嫌でも異端者が生まれます。そしてその異端の中で、全部ではないですが、異端の一部が影響を行使して、社会を変えます。したがって、どのようにしたって社会は変わっていきます。生物と同じです。生物も変わっていきます。同じように社会も必ず変わっていきます。これが社会は開かれたシステムを成すという意味です。



犯罪は正常な社会現象

我々は犯罪を嫌だと思つていますが、犯罪は実は正常な社会現象です。悪いできごとは悪い原因から生ずるといふ思い込みがそもそもの間違いです。社会がうまく機能しないから、犯罪が起きるのではありません。そうではなくて、社会が正常に機能するから、必然的に犯罪、悪が起きるのです。デュルケムが、このように言っています。

正常な社会学現象として犯罪を把握するとはどういう意味か。犯罪は遺憾だが、人間の性質が度し難く邪悪なために不可避免的に生ずる現象だと主張するだけに止まらない。それは犯罪が社会の健全さを保証するバロメータであり、健全な社会には欠かせない要素だという主張でもある。

したがって犯罪は避けようがない。犯罪は社会生活すべての本質的条件に連なる。しかしまさにそのことが犯罪の有益性を表す。なぜならば犯罪と密接な関係を持つこれらの条件こそ、道徳と正義が正常に変遷するために欠かせないからだ(Durkheim, E. (1937/81). *Les règles de la méthode sociologique*, pp. 66-70)。

つまり、犯罪がなければ、みんな同じ考えをしていますから、オリジナリティも生まれなし、社会も変わつていかない。

具体例を2つ出します。ひとつ目は失業者です。私などの素人よりも、ビジネスの専門家の皆さんの方がご存じですが、失業者の存在は、資本主義経済の論理的帰結です。市場原理がうまく機能しないから失業者が出るのではない。共産主義国家の中央機関が統制する計画経済は別ですが、資本主義社会では需要と供給によって労働市場が調整されますから、必ず人手不足になったり、逆に人手が余つたりする。失業はシステムの論理に組み込まれているわけです。だから需要と供給がびつたりにはなりません。資本の側としても、少し余剰要員がいた方が賃金を抑えられますから、都合が良いわけです。システムとして資本主義の論理の中に、ある一定の割合で失業者が生まれることが含まれているのです。失業は我々にとっては悪いことで、困ることなのですが、資本主義を認める限り、必要悪というか仕方がないということになります。

もうひとつ、性犯罪を取り上げます。強姦被害者はどうして苦しむのか。強姦で心に受けた傷は長期にわたって癒えま

せん。一生かかっても癒えない場合もあります。それはどうしてかという、性という人間にとつての特別な世界での造反行為だからです。ほとんどの強姦被害者にとつて、身体的被害は二の次です。

妊娠できなくなったり、性病を移される場合もありますが、それよりも一番の問題は、強姦されたことによる心理的な苦悩です。だから、肉体的被害がまったくなくても、強姦は厳しく罰せられるわけです。

では、なぜ我々は苦しむのか、あるいは、どうして性犯罪が起きるのか。それを考えるために思考実験をしましょう。

想像しにくいかもしれませんが、人間の性が完全に解放された社会を想像してください。ポノボというチンパンジーみたいなサルがいますが、ポノボは挨拶として性行動をします。1日中セックスしています。発情期も関係なく、いつもしています。「こんにちは」という代わりに、セックスするわけです。そういう状態に私たちの世界がなつたとします。例えば講演で話をしてるときに、この辺で誰かセックスする。あるいは私の奥さんが他の男の人と寝ているとか、女同士でセックスしているとか、男同士でも何でもいいのですが、みんながセックスしていて、この辺でも今から始まるとか、そういう世界です。信じられませんが、

そういう世界を考えましょう。つまり性タブーがまったくくない社会です。

1960年ぐらいには、そういう世界を夢見た人もいます。失敗しましたが、精神分析家のヴィルヘルム・ライヒがそういうことを言っていました。もし人間がそのような存在になつたら、性犯罪は消滅するか、あるいは今よりずっと数が減ると思います。誰とでも性関係を持てるわけですから、強要する必要がありません。キスしようと思つたらキスできますし、セックスしようと思つたらできるわけです。相手が拒否しないのですから。

性行動は、人を支配したり、自分の価値を確認するためのシンボルとしても機能しています。しかし、性が完全解放された社会では、誰とでも性行為ができるわけですから、シンボル行動としても機能しなくなり、意味がなくなります。

そうなれば被害者側も同じで、性関係を強要されても、そこに特別な意味がありません。けんかで殴られると同様に、単なる傷害や暴力にすぎなくなります。したがって、握手をしたり、一緒に食事をしたりする以上の意味が性から失われる社会では、平凡な出来事になるわけです。そして強姦被害者が受ける、性的造反による精神的苦悩も同時になくなります。「大変だ、握手されちゃった」と

言つても、「別にいいじゃないの」という話になります。

ですから、社会が機能不全に陥るから性犯罪が生じるのではない。我々は性道徳やタブーを正しい社会規範として考え、必要な制度として理解する。そこから必然的に性犯罪が起きて、被害者は苦しむ。性犯罪は性タブーを持つ社会に必ず生じる正常な現象です。そういう意味でデュルケムは、犯罪は正常な現象だと言つたわけです。

もちろん性の完全解放なんて絶対できません。そもそも考えて消去できるようなタブーではありません。人間が人間である限り、性道徳は必ず社会に生まれます。したがって性犯罪は人間社会の原罪のようなもので、絶対になくなりません。性犯罪は社会の規則を破る行為なのに、それを正常な行為だとデュルケムが言つたのは、こういうわけです。

米国イェール大学の法学部で、こんな話がされたそうです。おとぎ話です。経済が疲弊して多くの失業者をかかえ、困っている国を精霊が訪れました。その国の首相に、「大変ですね。実は私は素晴らしい技術を提供する用意があります。この技術を使えば、おたくの国の生産が増えてGDPも増加します。したがって失業者も減り、雇用がどっと増えて経済も活発化する素晴らしい技術で

す。いかがですか」と言います。首相が「それはいいですね」と答えると、妖精は「ただ、そのためには少し犠牲者も必要です。毎年2万人ぐらい犠牲者が出ます。特に若い人、男女2万人ぐらいに死んでいただきたいのですが、よろしいですか」と言いました。首相はびっくりして、これは大変だということ妖術を追っ払ってしまいます。ところで何の技術提供の申し出だったかと言うと、自動車の生産でした。アメリカでは大体1年間で2万人ぐらいが交通事故で死んでいます。日本では5000〜6000人でしょうか。交通事故による死者数は毎年ほとんど変わりません。完全になくすことはできません。

交通事故はどうして起きるか。ミハエル・シューマッハのような反射神経の鋭い人だけが自動車に乗っているわけではありません。少々とろい人も乗っているわけです。気の緩む瞬間は誰にでも起きます。時速100km以上で走行する凶器を与えておいて、一度も事故が起きないなんて考える方がおかしい。ある一定の確率で事故は必ず起きます。性犯罪も同じです。人間の性格は様々です。置かれた状況も多様です。悪い行為は絶対にしないという立派な人ばかりではありません。社会に欲望がある限り、誘惑に負ける人は必ず出てきます。そういう意味で、あ

る一定の犯罪が起きるのは仕方がないことで、システムの構造自体に既に含まれている。

二、歴史の原動力

歴史はどのように変化するか。世界の初期状態から何らかの法則に従って現在が生まれるならば、世界は初めから決定されているわけです。原初の初期状態から未来が全部決まっています。それは本来の意味で我々が了解する歴史ではありません。では、歴史が初期条件の単なる自動展開でないならば、それはなぜか。

ここで出てくるのが人間の自由や人間の意志です。人間の意志が世界を築くという考えです。しかし残念ながら、この常識的解決を採るのは難しい。まずは自由意志という考えについて議論します。

次に、もし個人の自由意志があるとしても、その個人の考えから遊離して、集団現象は勝手に動いてゆく。そして、もし自動運動しなかったら、逆に大変なことになる。そんな話しをしたと思います。

リベットの試験

まず、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、有名なベンジャミン・リベットの試験を取り上げます。リベットは被験者に、いつでもいいから自分の好きな

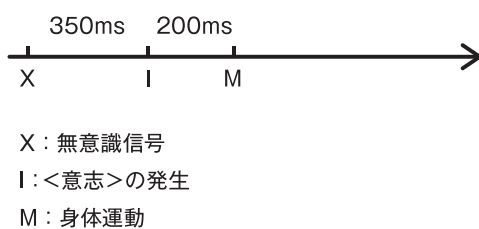
時に手首を持ち上げてくれと指示し、三つの計測をします。

1つ目は、3秒弱で1周回る時計を見せて、どの位置に針が来た時に手首を挙げようと思ったかを覚えておくよう指示します。例えば12時の位置に針が来た時に手首を挙げたのなら、その時点を覚えておいてもらいます。これは、その人の意志が発生した時点です。それから2つ目はreadiness potentialというのですが、脳波を調べて、運動を起こすための脳波が出た瞬間を調べます。3つ目は、手首に機械を付けて、手首が持ち上がった瞬間を測定します。

常識では、手を挙げようと思う瞬間が最初に来ます。手首を持ち上げようと思ったと同時に、その少し後に脳から指令が出て、その情報が手に伝達され、その後、手が挙がると我々は普通考ええます。

ところが、実験をやると、そのようになりません。次の図においてXは脳に表れる無意識信号です。350ms(0.35秒)です。すから割と長いのですが、それだけ経って初めて意志(I)が生まれます。それからまた少し、200ms(0.2秒)経って手首が実際に動くという、不思議な結果になりました。

実験結果



どうしてそのようなことになるか。実際は次のことが起きています。脳に無意識信号が発生すると、同時に二つのプロセスが起きます。一つは身体運動であり、手が動きます。これには大体550ms(0.55秒)かかります。それと同時に、もう一つのプロセスが意志を発生させる。

脳が意志を作ります。それに0.35秒かかります。意志が0.35秒で生まれ、手が動くよりも少し早いですから、我々は自分の意志が手を動かしたと勘違いするのですが、実は無意識の指令が意志や手を動かしたりしているのです。これは大変な話で、当時、つまり1980年代ですが、哲学者や社会学者などが大騒ぎしました。これでデカルトの二元論が証明されたと言う人もいました。つまり、脳とは関係のないところに意志があるのだ、

精神はこの辺の空中に浮いているのだと言う人もいました。今はそういうことを言う人はあまりいないのですが、以上の結果が出ました。

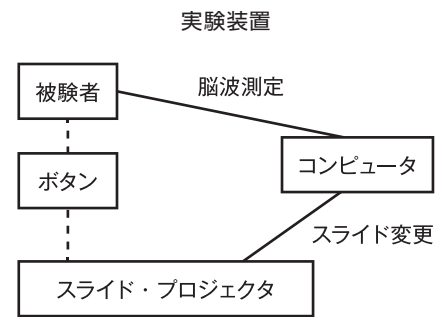
身体運動が起きる少し前に意志が生まれますから、意志が行動を起こすと思うのですが、実はそうではありません。この二つのプロセスは並列して起きますから、理屈としては、身体運動が先で意志の発生が後でもおかしくないわけです。脳の仕組みは実際そうなるはずありません。そうなるもおかしくありません。例えば、あいつは気に入らないから殴ってやろうと思った瞬間には、もうすでに、その人がひっくり返っている。こういう不思議な事態です。

神経命令系統



実は、脳の配線を変えた実験がありません。と言っても実際に脳を触ったわけではないのですが、トリックを使って、同じ効果が出るようにやりました。今度はプロジェクトでスライドを見せて、ボタンを押してもらいます。いつでも好きな時にボタンを押してスライドを変えてくださいと被験者に指示します。しかし、実はこのボタンはプロジェクトと接続されていない。つまり押しても何も起きないダミーのボタンです。

ところが、被験者の脳波を測定すると、指でボタンを押す0.5秒前に脳波が出ますから、その脳波をコンピュータが0.1秒ぐらいで検知して、スライドプロジェクトを変えてしまいます。そうすると、どういふことが起きるかという、被験者がスライドを変えようという（意志）を意識する以前、つまり脳波は発生したが、それがまだ被験者の意識に到達する前に、スライドが変わる。まだ手が動くはるか以前、そこどころか、「さあ、ボタンを押そう」と思う前に、スライドが変わってしまうのです。プロジェクトが被験者の心を読んでいるような不思議な感覚です。脳の指示がすでに出ている以上、もう手は止められませんから、勝手に手が動いてしまうという不思議な現象です。



被験者の受ける印象としては、まずスライドが変わってしまい、その後には意志決定が起きて、その後には指が実際に動くという不思議なことができる。先ほどのリベットの試験と同じように、無意識的な意志決定の信号が発生した後に、運動を実際に起こす過程と、意志が生まれる過程とが同時に発生しますが、コンピュータのトリックのおかげで、実際に動く前にスライドが変わってしまうわけです。

無意識の指令が出た後、350ms後に意識が発生し、その後で手が動くのですが、その前に既にコンピュータがスライドを変えてしまいます。

実際のプロセス

被験者の受ける印象



- X：無意識の指令
- A：100ms ほどかかってコンピュータがスライドを変える
- B：350ms 後に「意志」が意識上に形成される
- C：550ms 後に、指が実際に動いてボタンを押す



- A：次のスライドに変わる
- B：意志決定
- C：指が実際に動いてボタンを押す

マイケル・カザニガという脳科学者は、次のように言っています。

何かを知ったと我々が思う意識経験の前に脳はすでに自分の仕事をすませている。我々にとっては新鮮な情報でも、脳にとっては古い情報にすぎない。脳内に構築されたシステムは我々の意識外で自動的に仕事を遂行する。脳が処理する情報が我々の意識に到達する0.5秒前には、その作業を終えている (Gazzaniga, M. S. *The Mind's Past*, 2000, p.63)。

近代人が信じるような統一された自己や精神は存在しません。脳では多くの認知過程が並列的に同時進行しています。その中で意志や意識も生まれてくるわけです。もつと基礎的で無意識的な演算過程を経て、意志ができてくる。行動を起こす意志は行為を起こす出発点ではなく、逆に、ある意味での到達点です。先ほど言いましたように、脳が作る到達点が意識です。

変なことを言っているわけではありません。身体運動と同じように、我々の言語活動も脳が司ります。例えば脳をつぶしたら話せなくなります。脳梗塞になれば、話ができなくなる場合があります。言語活動は脳がつくり出します。感情も

そうです。脳をつぶせば、感情も思考能力もなくなりません。

身体運動と同様に、思考や感情や言語といった精神活動も脳が司っています。脳が精神活動を生む以上、精神活動は瞬間的に生まれません。ある一定の時間がかかりません。ですから、その間、我々は意志や感情を意識できないわけです。意志が生まれるためには、ある一定の時間がかります。0.35秒ぐらいかかる。その間、定義からして我々は自分の意志を意識できません。

どんな情報でも伝達には時間がかかります。最も早い伝達媒体は光ですが、光でも秒速30万kmでしか進行しません。太陽から地球まで1億5000万kmありますが、あれほど速い光でも太陽から地球まで移動するのに8分20秒ぐらいかかりません。太陽がこの瞬間に消滅しても、8分20秒間は、地球はその事実を知らずに、そのまま同じ軌道を回り続けます。8分20秒経つてから、接線の方向に動き出します。瞬間的にはどんなことも伝達できません。考えてみたら当たり前です。

ところで、精神と身体(脳)との関係には二つの立場があります。例えばデカルトなどは二元論です。あるいは唯心論もあります。皆さんは存在していない、これは全部私の精神が作る虚像であり、

実際には皆さんはいない。存在するのは精神だけで、物質はないという立場です。それらに対して唯物論の立場があります。これが大脳生理学の立場であり、私の立場でもあります。

それぞれの立場、哲学の内部で整合性を持っていきますから、どれが正しいとは簡単には言えません。どの立場を採用にせよ、我々は導かれる結論を最後まで引き受けなければなりません。もしデカルトみたいに考えるのでしたら、つまり私の精神と私の肉体とが別であるならば、精神活動は脳と関係ないわけですから、肉体が死ぬ時、精神も同時に消える理由が分かりません。未来永劫、私の精神は生きています。私の身体が生まれた時、精神が同時に生まれる理由もよく分かりません。ということは、世界の初めから世界の終わりまで私の精神がずっと存在することになる。それを認める哲学者もいますが、私は保守的ですから、そういう発想は採れません。脳が考えている、脳をつぶしたら精神活動は終わるというのが、私の考え方です。そうすると残念ですが、私たちの自由はなくなってしまうのです。

人間から遊離して動く社会現象

次は集団現象が個人の意志から離れて進行する事実について、ノーベル経済学

賞を取ったハイエクに依拠してお話しします。

ハイエクは世界の事象を3つに分類しました。1番目は山や川、生物といった自然物です。これは人間がつくるものではありません。2番目はマイクロフォンや机、コンピュータや自動車といった人工物です。これは人間が意図的につくるものです。3番目は、人間がつくるのですが、人間自身にも制御できない、言語や宗教、道徳などの社会制度です。宗教でも道徳でも言語でも、人間を全部殺してしまえば、なくなります。だから人間がつくるわけですが、特定の誰かがつくったわけではありません。道徳でもそうです。誰が決めたか分かりません。日本語はどんな変遷していますが、誰が日本語を生み出したかは分かりません。

このように、社会の現象は人間の相互作用から生まれてくるけれども、人間が意図してつくるものではありません。ハイエクは、このように分類しました。

さて、その三番目の社会制度の話をご紹介しますが、ハイエクのアプローチを理解するのに一番良い例はパニックです。劇場にたくさんの方がいます。あるいは野球場でもサッカー場でもいいですが、パニックが起きたとします。火事が起きたとか、誰かがピストルで乱射したとか、あるいはゴジラが出たとか何でも

いいのですが、驚いてみんな逃げようとする。しかし出口が小さいですから、逃げようとして慌てた人は、この辺で踏みつぶされて死んでしまいます。ゆっくりと落ち着いて逃げればよいのですが、みんな怖くて慌てますから、そういうわけにいかない。

ところが実はガセネタだった。ゴジラはいなかった、火事はもう消えたと言った。パニックは収まりませんが言っても、パニックは収まりません。踏みつぶされる人がいるから走ってはいけなく私は分かった。しかし危険が去ったと隣の人も知っているかは分からない。だから私は逃げ続けるしかない。そうしないと踏みつぶされる危険がある。すると隣の人も逃げざるを得ない。したがって結局パニックは収まりません。

走ってはいけなく、もう何も危険はないのだから止まれと全員が思っても、そのことを隣の人が知っているか分かりませんから、やはり逃げるしかない。そして私が逃げれば、隣の人も逃げます。制度というのはこのようにして、我々から遊離します。資本主義もそうです。資本主義を廃止できる人はいません。ロスチャイルドであろうが、ビル・ゲイツであろうが、資本主義をやめたいと思っても、やめることはできません。マーケットは人間の意志から遊離して勝手に動きます。

疎外

実はこのハイエクのアイディアは、彼が初めて考えたわけではなく、もつと前から他の言葉で知られていました。疎外です。マルクス主義が広めました。商品や制度や宗教は人間がつくり出したわけですが、それらは人間から離れて、逆にそういった社会的諸条件に人間自身が縛られる。宗教に人間が縛られる。人間がつくったのだから宗教を変えればいいのですが、それができません。宗教に縛られて、キリスト教に縛られて、人間は生きていくようになりました。こういう、主体としての在り方を失う状態を疎外と呼びます。これはマルクス主義の文脈ではEntfremdungというドイツ語の言葉が使われています。

ところがマルクスが初めて言ったわけでもなくて、マルクスの前に、同じドイツの哲学者ヘーゲルが既に、Entäußerungという他の言葉で表現しています。これは日本語では、疎外というよりも外化と訳されますが、同じことです。先ほどの腐敗と醜酔の違いのように、人間にとって都合の悪い時は疎外と言ひ、都合が良い場合には外化と言うだけです。両方とも、人間がつくる生産物が人間自身から遊離して、自律運動する状態を意味します。

疎外と外化は同一の現象です。人間が

つくった秩序にすぎないのに、どの人間からも遊離していく。言語もそうです。共同体の誰にも、権力者にも手の届かない外部として、我々の前に現れます。だからこそ社会制度は安定するわけです。

今、安倍首相が集团的自衛権をゴリ押ししています。賛成派も反対派もいますが、「あれは安倍が勝手に決めただけだ」と思う人もいるわけです。しかし、道徳のようなものについては、我々は「あいつが決めたので、俺はそのようなことは思わないよ」とは感じません。

我々がつくったのではない、外来物として現れてくるから、我々はそれを受け入れることができる。誰かが勝手にねつ造したのではなくて、自然にできたから、本物の普遍的価値であると我々は感じるのです。先ほどのデュルケムの犯罪論を思い出して下さい。普遍的価値はない。どんな価値も社会的に生まれる。しかし、それが我々にとって普遍的な価値として現れる。そのメカニズムをハイエクは、こうして説明しました。

社会現象を起こす原因は、人間の営為以外にない。人間を全員殺せば、社会現象はあり得ません。しかし、社会現象は人間自身にも制御できない。社会という全体の進行は、人間という構成要素の意識や行為に対してずれてゆく。あたかも外部の力が作用するような感覚を我々は

持つ。人類が地球上に誕生した時、言語も市場も宗教も道徳ももちろんありませんでした。それらは時間を経て次第にできあがります。社会システムがたどった具体的な道筋は調べることができるかもしれない。しかし、そこに法則はありません。どのように進むかは誰にも分からない。世界の秩序には何ら根拠はありません。無根拠から出発しながらも、こうして社会秩序が生まれてきます。社会制度は人間から遊離するから、我々は受け入れられるわけです。

ポリアの壺

一つ思考実験を考えていただきたい。ポリアというハンガリーの数学者が提示した有名な問題で、ポリアの壺というのがあります。

箱があつて、中に白い玉と黒い玉が1個ずつ入っています。目をつぶってどちらかを選びます。たまたま白だったら、その白を戻してもう1個白を入れます。黒だった場合は、黒を戻してもう1個黒を加えます。この作業を繰り返します。初めは黒玉の割合が50%です。次に黒玉2個と白玉1個になると、全体の67%が黒になりますから、50%から67%へと割合が大きくなります。しかし既に1000個の玉があれば、そこに1個の白を加えようと黒を加えようと、割合

はほとんど変わりません。

このようにして、新しい情報が全体に占める相対的な重要性が、どんどん減っていきます。非常に単純ですが、人間の記憶や社会に蓄積される記憶のモデルです。我々はたくさん知識を持っています。そこに新しいものが入ってきますが、その前にたくさんさんの知識があるわけですから、こういうモデルを考えることができます。

作業を実際にやってみますと、黒玉と白玉の割合は一定の値に収斂します。ところが、もう1度、黒玉と白玉一つずつの状態に戻して同じ作業をすると、今度は違う値に収斂します。どの値に収斂するかは前もって分からず、やってみないと分かりません。もちろん何度も繰り返して収斂の値を平均すれば、黒玉と白玉は2分の1ずつになります。100万回やって平均値を取れば2分の1になりますが、1回やって、どの値に収斂するかは分かりません。一つの定点に至ることしかわかりません。

我々が生きている社会もよく似ています。初期条件から「真理」が生まれる。道徳や価値観が生まれ、ある方向に歴史が進む。どこの方向にいくかは分かりません。ところで我々が真理だと思つのは、歴史が繰り返せないからです。もし

世界を初期状態に戻して、歴史変遷をもう一回繰り返せば、今度は違う（真理）が生まれることでしょうか。

人類が生まれてまだ300万年か400万年にすぎません。ダーウィンが偉かったのは、歴史に法則がないことを示した点です。生物は必ず変化します。突然変異とはコピーの失敗です。再生産に失敗して生まれた新しい個体が、たまたま与えられた生態系において、他の個体よりも子孫を残す確率があれば、新個体が増えていく。そうやって種が変わっていきます。生物は必ず変わる。変わらざるを得ない。しかし変化に法則はあり得ない。ダーウィンはこう言ったわけです。

もう少ししたら核戦争でみんな死んでしまうかもしれません。放射能で生物がほとんど死ぬかもしれません。しかし放射能でも平気なバクテリアがいて、また進化を始める。1億年ぐらいたったら、人間より優秀な生物ができるかもしれません。生物の進化から見たら、人間の歴史など一瞬ですから、あと100万年ぐらいたしたら、人間を食べるような生物が生まれてきて、人間が全部食べられてしまうかもしれません。そう考えるのが論理的で、荒唐無稽な想像ではありません。

歴史は繰り返されないし、私たちはも

うすぐ死にますから、社会の価値の正しさを我々は信じていることができる。しかし、もっと大きいスケールで見れば、我々の考えが相対的だということは明らかでしょう。

三、べき論の陥穽

最後は、「べき論」の陥穽について話します。先ほどから申し上げていますように、集団が個人の意志から遊離する。遊離するならば、人間の未来は人間自身が決められるのかという問題が出てきます。人間の意志とは無関係に社会は動いていくのではないか。それならば、「べき論」の意味が失われてしまいます。

素朴な疑問から始めましょう。私が小さいころ、「野生の王国」という野生動物のドキュメンタリー番組がありました。今でもよく似たものがありますが、そういう番組を見ると、キリンの首が長いのは、初めは下の方の葉っぱを食べていたが、だんだんと上の方の葉っぱしかなくなったため、首を伸ばして一所懸命食べているうちに首が長くなった。そして、その子どもも首が長くなって、そのようなことを繰り返しているうちにキリンの首が長くなったと説明されます。

これはラマルクの用不用説であり、明

らかな間違いです。獲得形質の遺伝を信じる生物学者は今日まじりません。間違いなのですが、そういう説明が繰り返されます。どうしてなのか。それは、テレビ番組制作者の頭が悪いからではなく、人間にとって、そういう説明、目的論が理解しやすいからです。単なる誤りではなく、背景に深い理由が隠されていると思います。

最近、パリで日本人と晩飯を食べながら話をしていたのですが、東日本大震災後の対応に彼は憤っていました。国民の大多数が初めは原子力発電の再稼働に反対し、原子力発電はもうやめようと言っていた。しかし原子力発電を再開しないと電力料金が上がる。家庭の料金は少々上がっても大したことはないのですが、電力をたくさん使う企業では競争力が落ちて倒産する。すると失業者がたくさん出て、日本経済が大変になる。そういうふうに自民党や電力会社に脅されると、

国民はすぐに、やはり再稼働をしようかと、すつとシフトし、認める主張をするようになりました。それを駄目だと知人は言うのです。日本人はいつになったら分かるのだろうか、どうしてドイツのように脱原発の歩みを始められないのだらかと一所懸命に言いました。

彼は勘違いしていると思います。ビジネスの世界にいらっしやる方に私がこ

んなことを言っても釈迦に説法ですが、一般に組織の決定プロセスには様々な要所、関門があります。担当者の拒否に遭うと、良いプロジェクトでもつぶされてしまいます。役所で許可をもらう場合でも、「おまえの顔が気に入らないからハシコを押さない」と担当者拒否されたら、どうしようもありません。執行部まで話が届けばいいのですが、届かない時には、担当者を超えて、上の人間を動かさなければいけない。接待したり、賄賂を渡したり、脅したりする。そういうことをして、とにかく障害を排除できないといけないわけです。

組織というのは、大学でもそうですが、いろいろな思いが渦巻き、複雑な利権や思惑の網に囲まれていますから、集団行動は合理的判断だけでは決まらない。人間ですから、部署間のボスの確執やライバル意識など、いろいろな思いがあります。

原発の再稼働を憤る人は、ある意味で擬人法を犯している。集団を一つの人格と見立てるから、なぜ日本人はいつになっても悟らないかと嘆くのですが、そのような日本人という集団の人格は存在しません。集団というのは、いろいろな人がいて、いろいろな思惑で動く複雑なシステムです。政府もそうで、安倍さんが一人で決めているのではない。裏でい

ろいろな人が操ったりもしていますから、そういう人たちの中、集団の中で決定されている。

べき論の民

「べき論」や規範論はどれも、人間の未来を構築する上で、人間自身が意識的に貢献できるという前提に立ちますから、システムを未来に開く思考だと考えられている。しかし、実は逆にシステムを閉鎖するための虚構ではないか、イデオロギーではないか。これが私の問いです。

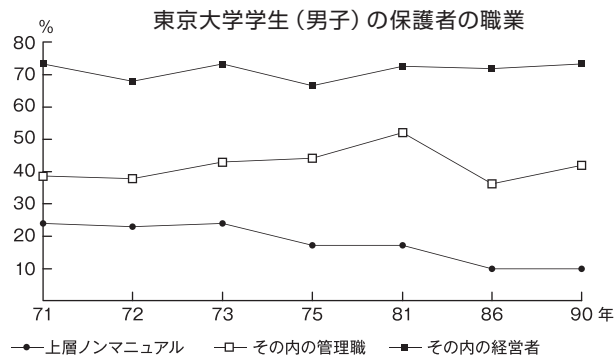
具体的な例を出します。学校制度です。戦前から戦後すぐの学校は、貧乏人が行くコースと金持ちが行くコースに分かれていました。戦前は、小学校を出した後、貧乏人は尋常小学校に2年行って、それで終わりです。金持ちは中学校に行つて、高校も行ったりするコースに分かれていました。戦後になって、それでは不公平だから、みんな同じように教育しようということになった。日教組などが改革を要望して、みんな同じ学校に行くようになりまし。小学校、中学校、高校を出るようになります。それは日本だけでなく、先進国はみなそうです。フランスもドイツもイギリスもアメリカも同じです。

ところが、同じ教育機会を子どもに与

えても、実は出身階級がほほそのまま生産されてしまう事実が、1970年代に入って明らかになりました。機会均等を実現しても、実質的な平等はもたらされないことが分かりました。それは日本も同じです。機会の均等が進んだのですが、上層の師弟の多くは名門高校や名門大学へ行く一方、庶民からは難しいという傾向が続いている。

刈谷剛彦さんという教育社会学者の『大衆教育社会のゆくえ 学歴社会と平等神話の戦後史』という本に、こんなことが載っています。東大の男子学生の保護者の職業を見ましょう。1971年から1990年までの学生の71.8割は、上層ノンマニユアルという階層に属する父親を持つ。上層ノンマニユアルとは、大企業や官公庁の管理職、つまりエリートです。それから会社経営者・大学教員・弁護士・医師です。今は私立の進学校があつて、麻布・ラサール・灘・開成などが有名ですが、お金がない人は私立高校に行けないのでこういう構造になつているかというところではあります。東京の日比谷高校は公立高校ですが、日比谷高校が有名だった時代から東大学生の出身構造は変わっていません。ですから、授業料を無料にしたり、奨学金を与えたりしても、この階級再生産構造は変わりません。

東大だけではなく、旧帝大・東工大・一橋・神戸大・東京外大・大阪外大・早稲田・慶應のデータもあります。



(注) 資料は「東京大学学生生活実態調査」による。
上層ノンマニユアル：大企業と官公庁の管理職・会社経営者・大学教員・弁護士・医師など
(出所：刈谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ：学歴社会と平等神話の戦後史』中公新書、1995年、65頁より作成)

ると、上層ノンマニユアルの子供は、平均値に対して、3.6倍の率で有力大学に行けたのが、後には3.1倍くらいに下がったことがわかります。もちろん庶民の合格率はもっと低く、1以下ですから、上層ノンマニユアルの人たちは、貧乏人の7倍か10倍ぐらいの確率で有名大学に入れます。これは日本だけではなく、フランスもイギリスもアメリカもそうです。階級構造がほほ同じように再生産されてしまします。

有力大学入学者の父親の職業

第1コーホート(1926-35年生)	有力大学入学者の父親の上層ノンマニユアル比率	父親世代の職業構成比(上層ノンマニユアル)	輩出率
第1コーホート(1926-35年生)	56.2	15.7	3.580
第2コーホート(1936-45年生)	64.6	20.4	3.167
第3コーホート(1946-55年生)	75.0	24.2	3.099
第4コーホート(1956-65年生)	75.0	—	—

(出所：刈谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ 学歴社会と平等神話の戦後史』中公新書、1995年、67頁より作成)

第1コーホートは1926～1935年生まれですから、20年足して1945～1955年ぐらいの時に大学に入った人です。その人たちの親は、56.2%が上層ノンマニユアルの出身です。その比率はだんだんと増えていきます。ただし、これは見かけの数字です。実は上層ノンマニユアルというカテゴリーが統計的に増えていきます。労働者人口の中で初めは15.7%だったのが、後には24.2%と増えている。そこでデータ修正す

子供の学力の差は家庭環境が生みま
す。小学校から子どもの能力には差が付
くのですが、大学の先生でしたら、自分
が受験勉強した経験を持ち、勉強する生
活習慣を知っています。そういう家の子

どもと、そうでない子どもでは、子ども
の成長が違ってきます。小さい時から世
界文学全集を与えられて読む家庭と、お
父さんと一緒にパチンコに行って遊んで
いる家庭では、子どもの知的成長が違っ
てきます。小・中・高校という学校制度
は、そういう格差を是正するところでは
なく、逆に差を拡大する装置です。フラ
ンスではピエール・ブルデューという社
会学者が、そういう研究をよくやってい
ました。

ですから、いくらお金の問題だけを論
じて何も変わらない。こういう現実が
あります。この問題自体はこの国も同
じです。ところが、この事実が日本では
隠蔽されてしまいます。別に意図的に隠
したわけではないのですが、問題に気が
付かなかった。

米国には人種問題があります。いくら
機会均等を果たしても、差別を乗り越え
て黒人が階級を上るのは非常に難しい。
イギリスも硬直した階級社会です。出身
に応じて言語も違いますし、文化も違
います。イギリスでは、生まれた時の文化
が一生染みついて、階級が刻印されて生

きて行く社会です。だから、機会均等化
だけでは駄目だと1970年代に認識さ
れました。アメリカだったら、アファ
ーマティブ・アクションなどの政策が出て
きます。

ところが日本では人種問題がありません
し、明確な階級区分もありません。そ
の辺を歩いても、普通にしゃべっている
だけだったら、道行く人がどの大学を
出たか分かりません。イギリスだったら
言葉も違うので、話せばすぐに出身階級
が分かります。しかしエリートも庶民も
日本は同じ文化を共有しています。その
ような事情があるので、平等を実現する
ための方策として教育の大衆化や平等化
を推進して、誰もが学校に行くようにす
れば、後は各自の努力の差で将来が決ま
り、少しずつ貧富の差は是正されて、公
平な社会になっていく。そういう考えが
日本では定着しました。しかし実はそう
はいかないのです。

私はフランスに住んでいます。日本
の受験の様子をインターネットなどで見
ていて面白いと思うことがあります。
マークシート方式は今でもありますが、
あれは何のためでしょうか。受験生が多
いから、記述式の解答をいちいち採点し
たら大変だということもありますが、そ
れだけではないと思います。フランスで
は6月にバカロレア試験があつて、20万

人が受けました。記述式の試験です。か
ら、朝から夕方まで6日間かかります。
学生にとって大変な試験ですが、採点す
る方も大変です。高校の先生がたくさん
動員されて採点します。公平な採点にな
るようにと一応の基準は設けます。しか
し記述式ですから、客観的な採点などで
きるはずがありません。哲学の試験だ
と、例えば「愛について述べよ」といつ
た試験が出ます。学生は全員、哲学の試
験が必須です。論理的に考える能力を調
べるためです。20点満点で10点取れば合
格なのですが、10点だろうが、11点だろ
うが、9点だろうが、実はあまり変わり
ません。

日本では、そういう曖昧なことは許さ
れない。なぜかという、公平性の神
話が信じられているからです。試験の公
平ささえ守れば、それでいいのだと思わ
れているから、マークシートなどが利用
されるのでしよう。受験の時、ストップ
ウォッチで時間を正確に計りますね。1
秒などどうでもいいのですが、そういう
ことをしっかりすれば、試験の公平性に
つながると思っているからです。フラン
ス人はそのようなことを信じていません
から、試験の表面的な規格化にあまり神
経を使いません。

家庭環境とか遺伝形質は、我々にどう
しようもない〈外部〉です。金持ちの家

庭に生まれたいと思ってもできません。
ノーベル賞学者の家庭に生まれたいと
思ってもできません。これら外部要素の
影響を無視して、成績の違いが、生徒の
能力という〈内部〉のせいとされる。こ
れは拙著『責任という虚構』で分析した
責任の論理構造と同じです。外部の影響
を無視することで、原因が内部化され
る。要は自己責任の論理です。「おまえ
の頭が悪いからこうなった」「努力しな
いからだ」と言うわけです。しかし、実
はそうではない。劣悪な家庭環境に生ま
れたというハンディキャップがあつたの
です。

社会を開こうとする「べき論」こそ
が、実は社会を閉鎖すると言ったのは、
こういう意味です。社会の既存構造を正
当化して、社会の変化を妨げる。要は、
我々が行っているのは出来レースです。
もちろん、階級構造の完全な再生産では
ありません。貧乏人の子どもが大学に入
ることもありますし、社会で成功する
ケースもあります。しかし、大まかに
言つて、このような傾向があるというこ
とです。

機会均等のパラドクス

単純化しますが、2つのケースを考え
て下さい。ひとつは戦前のように、庶
民と金持ちは違う学校に行くというやり

方。もうひとつは、今のように機会均等の下の自由競争です。全員同じ中等教育を受けさせ、成績が良ければ上の学校へ行くとか、東大へ行くというやり方です。

しかし、先ほど言いましたように、どちらの場合も結果は同じになってしまふ。階級構造が再生されるだけで、結果は同じです。見かけ上は自由競争ですが、実は出来レースであり、ハンディキャップレースなのです。競馬の場合とは反対で、弱いものもつとハンディキャップを背負うというレースです。ですから、それを乗り越えるのは、すごく大変です。

庶民と金持ちが違う学校に行く事実は、どちらのやり方でも変わりません。

しかし心理的意味が異なります。「本当は俺は頭がいい。だけど、うちは貧乏だったから、残念ながら上の学校に行かせてもらえなかった。これは俺が悪いのではない」「学歴がないから会社で出世できなかった。しかし、それは俺が悪いのではない」。これが第一のやり方、つまり貧富の差によって異なるコースに進む場合に生ずる感覚です。

第二のやり方は違う感覚を生みます。成功した人と同じように学校に行かせたのに、「お前はバカだから、上に行けなかったのだ」と言われてしまう。結局、

有名大学にも入れず、試験も失敗するわけですが、第一の学校制度ならば、「社会が悪い。俺が悪いのではない。だから社会を変えよう」と社会運動に加わったり、革命を起こしたりする。ところが第二の学校制度の下では、自分自身が悪いということですから、社会は悪くない。したがって社会を変えようと変革運動に加わらない。「べき論」は社会を閉じるイデオロギーとして機能してしまうのではないかと言った所以です。

「自己責任」という呪文が日本でよく唱えられます。これは学校制度だけではなくて、近代の本質に関わる問題です。近代になると、人間は自由で、世界は人間自身が築き上げるという理解がなされた。しかし近代に入ったのは最近の話です。フランス革命からまだ200年しか経ってませんし、明治維新からたった100年ちよつとです。人間の世界を人間自身が作るとは、それまで誰も考えていませんでした。今はみんな当たり前のように思っていますが、たかが100年、たかが200年です。世界を人間が作るなんて思っていなかった。

本人の能力の問題なのだから、格差が出るのは仕方がない、それは正当だと言う人もいます。そうかもしれません。ただ、それならば、論理を最後まで貫徹しなければいけません。貫徹する覚悟が

我々にあるか。身体に障害を持って生まれてくる人がいます。あるいは生まれてから脳性小児麻痺にかかって、車椅子で一生過ごす人もいます。こういう人に対して自己責任だと我々は言いません。先の論理でいけば、言ってもいいはずですが。しかし言いません。障害はもちろん誰のせいでもない。本人のせいでもないし、親のせいでもない。だけど、そういう不幸は現実に、ある一定の割合で起こります。

美しい女性も男性もいる。たまたま、そうなるわけです。ところが、それによって人生が大きく変わる。このことは次に上梓する本で書こうと思っていますが、結婚相手だけでなく、就職もそうですし、いろいろなことが左右される。学校でも、綺麗な顔の子は、いい点をもらいます。そういう現実があります。教師は無意識に差別している。

それから、身体能力に恵まれる人もいれば、そうでない人もいます。ワールドカップに行きたいと思っても、誰にでも行けるわけではない。努力すればよいのか。血反吐を吐いてでも努力できる人もいれば、すぐに泣いてやめる子どももいます。精神活動は脳がつかさどる。脳は身体の一部ですから、努力も身体の特徴です。頑張れと言ってもできるものではない。できる人もいるし、できない人も

います。これは結局、家庭環境と遺伝という外部が大きな原因になっているわけです。

個人の能力差や能力差を減らす方法が実はあります。子どもを親から取り上げて集団で教育するのです。ソ連でしばらくやりました。しかし、こんなことをやる人は今いません。そんなことをしたら大変なことになります。しかし、そうすれば家庭環境だけでは逃れることができる。しかし、それでも遺伝形質の影響はどうしようもない。したがって、よくできる人、よくできない人、速く走る人、走れない人という差は必ず生まれま

す。それでも社会を平等にしたかったら、クローン人間を作る。あるいは人間にリタイアしてもらって、ロボットにやってもらおう。このぐらいのことをしないと、社会は平等にならない。平等な社会は絶対につくれないのです。これが人間の悲しい現実です。我々は現実を正視せず、ごまかすから何とか生きていられる。西遊記を思い出して下さい。孫悟空に対して釈迦が、「そんなに自信があるならば、私の掌から1歩でも出てみる」と論ず話です。孫悟空は筋斗雲に乗って地の果てまで飛んで行きます。これで大丈夫だろうと思つた頃、5本の柱に行き着いた。地の果てに来たと思つたが、実はそ

これは仏陀の指だったという物語です。

我々はここ100年、200年、人間が世界をつくるのだと思ってきたけれど、それは間違った認識ではないか。神がいると言いたいではありません。

日本には死刑制度があります。日本人のほとんどは死刑制度維持の立場です。死刑は実際に我々が見たら残酷ですか

ら、国民が見たら、死刑制度を維持できない。だから法務省は実態を隠す。国民が実態を知らないから、死刑制度が維持できる。死刑制度に抑止力がないことは完全に分かっています。死刑がなくなっても、犯罪率は減らない。死刑はおまじないみたいなものです。あってもなくても犯罪率は変わりません。

私たちは牛や豚を食べます。牛や豚を殺しますが、自分で殺して食べていたら大変です。自分で育てた牛や豚を食べるのは辛い。あるいは我々は死んだら、葬儀屋に頼んで処理してもらいます。昔は家族が葬儀の準備をしましたが、我々が今やるのは大変です。

人間の世界には不平等や、見たくないものが、今日話さなかったこと以外にもたくさんあります。「お前が悪い。自業自得だ。自己責任だ」。社会的弱者は何度もこう言われて納得させられます。犯罪者も本当はそうなのです。『責任という虚構』で詳しく書きました。しかし、

嫌な事実を目をつぶり、都合の悪い事実を隠蔽するから、我々は生きられる。そうでなければ、生きられない。そういう存在が人間なのではないか。これが私の今の疑問です。

べき論の正体

「べき論」とは何か。「べき論」の正体は雨乞いのダンスではないか。雨乞いのダンスをしても、別に雨が降ってくるわけではない。それでもやる。それと同じではないか。「べき論」は呪文の一種だと思います。

椰掬（やゆ）するわけではありません。人間心理にとって、この呪文は必要なのです。カジノなどに行ってサイコロを振る。「ぞろ目が出る」と念じて、出るわけがない。出たらインチキです。受験発表で「何とか受かっていますように」と願います。しかし結果はもう決まっていますから、そんなことを念じても仕方ありません。それでも我々は祈る。事故で飛行機が落ちて、300人の乗客のうち150人が死んだとしましょう。自分の家族が乗っていたら、「どうか150人の生きている方に含まれていきますように」と祈ります。祈っても仕方ないのですが、そうします。それが人間の心理です。運命とは何かとか、偶然とは何かとい

う難問がありますが、どのように認識するかという問いと結びついて、「べき論」の存在論は大きな研究テーマになると思います。

局所的には社会に意図的に介入できません。しかしそこにも問題があります。害虫を殺すと、その時はいいのですが、生態系が狂ってかえって困ることもある。良かれと決めた政策が結果的に大変な事態を招くこともある。社会は複雑なシステムですから、我々が良いと思っても、そのような結果になるとは限らない。

「べき論」はまったく無意味なのか。正直、今の私には分かりません。次に『正義という虚構』という、またふざけた題の本を出しますが、その折りに私の答えを提示しようと思います。先ほどお話ししたように、私は主体性を否認します。もちろん、主体性や自由をなくしたわけではないありません。私自身、非常に個人主義的で、「小坂井さんのように主体の塊みたいな人間が、どうして主体はないと、そんなに言いたいのだ」とよく尋ねられます。しかし論理的に考えると、主体はないという結論しか出てこない。

だから、意志によって世界が構築されるという常識も私は退けます。先ほど示したように、そうでないと、人間から遊離する普遍的価値が生まれてこないから

です。ここで、私は正直困ってしまう。現時点で私に残された、かすかな希望は次の道です。多分、これもうまくいかないのではないかと内心思っているのですが、こういうことを考えています。

かすかな希望

学習の可能性と主体の存在は別です。犬や猫でもネズミでも学習します。犬にお手を覚えさせるといふ話ではありません。こちらに行ったら危ないとか、この人間にはえらい目に遭うとか、サルでもネズミでも、そういうことを学習します。

それでも我々は動物に主体性を認めません。犬には主体性がある、人間のよさな意志があるからとは考えない。しかしネズミでも、ほとんど高等動物はそうやって学習するわけです。だから人間に主体性がなくても学習できる。実際に我々は学習しているわけです。だから主体性を退けても、学習可能性は矛盾ではない。

同様に、社会システムに学習能力があると考えるもおかしくない。社会を擬人化するのではありません。人間の主体性を退けても、人間という認知システムに学習能力を認めることができるように、社会にも学習能力を認めることができ。ホロコーストの原因を分析して、社

会がそれを理解する。日本人はホロコーストにあまり関係ありませんが、フランスではユダヤ人差別に非常に敏感です。これが社会の学習です。日本では原爆や原発に敏感で、感情的な反応が出ます。これは個々の人間の反応と言うよりも、社会というシステム全体の反応です。相互作用の中で、ああいう反応が起きてくるわけです。自分自身はそう思っていないくても、そう言わなければいけないという雰囲気ができあがっている。政治家の発言もそれに左右されている。そういう社会システムが学習により、だんだんとできてくる。

意識的な努力のことを言っているのはありません。そもそも意識が何の役に立つかという問いの答えも誰にも分かっていません。意識なんて必要でないと言う学者もたくさんいます。たまたまあるだけで実は要らないと言う人もいます。ハイエクがこういうことを言っています。

我々が自らの精神に起きる多くの事柄に気づかないのは、それがあまりにも低いレベルにおいて進行するからではなく、あまりにも高いレベルで進行するためである「……」。

このような過程は「意識下」というよりは「超意識的」と呼ぶ方が

適切かもしれない。何故なら、これは姿を現すことなしに意識過程を支配するからである（F・A・ハイエク「抽象の第一義性」（吉岡佳子訳）、アーサー・ケストラー編著『還元主義を超えて』工作舎（1984年）所収437頁）。

これはどういう意味か。無意識というと、フロイトの無意識のように、どこか低いところに隠れているという感じがするのですが、ハイエクの考えはそうではなくて、知識は社会の中に分散されているという意味です。例えばインターネットを考えてください。Googleの検索装置が進化してきました。中央集権的に誰かが情報を管理しているのではない。いろいろなところから情報が入って、システムが進化していくわけです。

同じように、いろいろな知識が社会の至る所にあります。どれほど頭のいい人でも、その人の頭の中に人類全ての知識があるわけではない。いろいろなところに知識が分散されています。だから我々は知識をコントロールできない。我々個人が思っていることから、社会は離れて、相互作用の中で動いていく。

そういう意味で、社会が何かを学ぶのです。学ぶといっても、良い方向に行くという意味ではない。もしかしたら学

ぶことによつて、核戦争を始めるかもしれない。我々が今良いと思うことが、100年後には悪いことになるかもしれません。今、我々が良いと思う方向で努力していることが何かの形で残っていく。それが無駄になったり、あだになるかもしれないが、とにかく社会の学習として残っていく。非常に寂しいことですが、そのぐらいしか、「べき論」の有効性を言えないのではないか。このあたり問題はこれから考えますので、宿題としておいて下さい。どうもありがとうございます（拍手）。



略歴

小坂井敏晶（ごさかいとしあき）
パリ第八大学心理学部准教授
1956年、愛知県生まれ。
アルジェリア技術通訳（1979年—1980年）を経て、1981年にフランスに移住。早稲田大学第一文学部除籍（1981年）、パリ社会科学高等研究院修了（社会心理学博士、1994年）、フランス国立リール第三大学准教授（1994年—2003年）の後、フランス国立パリ第八大学心理学部社会心理学准教授、現在に至る。

主な著書












- ・ *Les Japonais sont-ils des Occidentaux? Sociologie d'une acculturation volontaire*, L'Harmattan, 1991
- ・ 『異文化受容のパラドックス』朝日選書 1996
- ・ *L'étranger, l'identité. Essai sur l'intégration culturelle*, Payot, 2000（イタリヤ語訳 *Lo straniero, l'identità. Saggio sull'integrazione culturale*, Boringhieri, 2002）
- ・ 『民族という虚構』東京大学出版会 2002（韓国語訳 2003、台湾語部分訳）、のち、『増補 民族という虚

- 構』ちくま学芸文庫2011
- ・『異邦人のまなざし 在パリ社会心理学者の遊学記』現代書館 2003
 - ・『責任という虚構』東京大学出版会 2008
 - ・『人が人を裁くということ』岩波新書 2011
 - ・『社会心理学講義〈閉ざされた社会〉と〈開かれた社会〉』筑摩選書、2013










1からシリーズ

- | | | | |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|  1からの流通論
石原武政・竹村正明 (編著) |  1からのマーケティング (第3版)
石井淳蔵・廣田章光 (編著) |  1からの戦略論
嶋口充輝・内田和成・黒岩健一郎 (編著) |  1からの会計
谷武幸・桜井久勝 (編著) |
|  1からの観光
高橋一夫・大津正和・吉田順一 (編著) |  1からのサービス経営
伊藤宗彦・高室裕史 (編著) |  1からの経済学
中谷武・中村保 (編著) |  1からのマーケティング分析
恩藏直人・富田健司 (編著) |
|  1からの商品企画
西川英彦・廣田章光 (編著) |  1からの経営学 (第2版)
加護野忠男・吉村典久 (編著) |  1からのファイナンス
榊原茂樹・岡田克彦 (編著) |  1からのリテール・マネジメント
清水信年・坂田隆文 (編著) |
|  1からの病院経営
木村憲洋・的場匡亮・川上智子 (編著) |  1からの経営史
宮本又郎・岡部桂史・平野恭平 (編著) | | |

碩学叢書

- | | | | |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|  マーケティングクリエイティブ (1巻)
石井淳蔵・大西潔 (編著) |  病院組織のマネジメント
猶本良夫・水越康介 (編著) |  百貨店のビジネスシステム変革
新井田剛 (著) |  国際マーケティング
小田部正明、K・ヘルセン (著)
栗木契 (監訳) |
|  メガブランド
張智利 (著) |  [新訳] 事業の定義
デレク・F・エーベル (著)
石井淳蔵 (訳) |  セールスインタラクション
田村直樹 (著) |  ことばとマーケティング
松井剛 (著) |
|  新しい公共・非営利のマーケティング
水越康介・藤田健 (編著) |  企業変革における情報システムのマネジメント
依田祐一 (著) |  よみがえる商店街
畢滔滔 (著) | |

碩学舎ビジネス双書

- | | | | |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|  商業・まちづくり口辞苑
石原武政 (著) |  ビジョナリー・マーケティング
栗木契・岩田弘三・矢崎和彦 (編著) |  旅行業の扉
高橋一夫 (編著) |  コトラー8つの成長戦略
フィリップ・コトラー / ミルトン・コトラー (著)
嶋口充輝、竹村正明 (監訳) |
|  寄り添う力
石井淳蔵 (著) |  グローバル・ブランディング
松浦祥子 (編著) |  医療現場のプロジェクトマネジメント
猶本良夫・永池京子・能登原伸二 (編著) |  愛される会社のつくり方
横田浩一・石井淳蔵 (著) |
|  SNSで農業革命
蓮見よしあき (著) | | | |

SBJ 碩学舎ビジネス・ジャーナル

<http://www.sekigakusha.com/sbj/>



vol.1
商業を捉える論理
石原武政・水越康介・西川英彦



vol.2
「創造的瞬間」とは何か？
石井淳蔵・水越康介・西川英彦



vol.3
マーケティングの論理
嶋口充輝・水越康介・西川英彦



vol.4
事業の定義復刊の意義
石井淳蔵



vol.5
欲望とは何か
田中洋・水越康介・西川英彦



vol.6
データをマッサージする
中西正雄・川上智子・石淵順也



vol.7
日本の管理会計：
「数字へのこだわり」とインターアクション
が創造性を生み出す
谷武幸・窪田祐一・廣田章光



vol.8
碩学アーカイブ 石原武政-1
石原武政



vol.9
碩学アーカイブ 石原武政-2
石原武政



vol.10
碩学アーカイブ 石原武政-3
石原武政



vol.11
日本のコーポレート・
ガバナンスを問う
加護野忠男・山田幸三・吉村典久



vol.12
碩学アーカイブ 石原武政-4
石原武政



vol.13
『1からの病院経営』
刊行にあたって
木村憲洋・的場匡亮・川上智子



vol.14
『セールスインタラクション』の
刊行にあたって
：営業が生み出す消費欲望とは？
松井剛



vol.15
碩学アーカイブ 石原武政-5
石原武政



vol.16
『新しい公共・非営利のマーケティング』
の刊行にあたって
水越康介・藤田健



vol.17
第1回碩学舎賞奨励賞受賞作
「日本企業の多角化と企業価値に
関するパネルデータ分析」
池田雄哉



vol.18
第1回碩学舎賞奨励賞受賞作
「後発企業のネットワーク戦略
-北海道におけるワイン・クラスターの競争逆転-」
長村知幸



vol.19
碩学アーカイブ 石原武政-6
石原武政



vol.20
消費者行動研究と戦略論をつなぐ
和田充夫・新倉貴士・水越 康介



vol.21
最終講義
「マーケティングと消費者行動」
池尾恭一



vol.22
1からの経営学部
伊藤貴晃・岸本のぞみ・久野恵理子
(法政大学経営学部 西川英彦ゼミ
チームローニーズ)



vol.23
『よみがえる商店街
：アメリカ・サンフランシスコ市の経験』
刊行にあたって
畢滔滔



vol.24
『寄り添う力
：マーケティングをプラグマティズムの視点から』
刊行にあたって
石井淳蔵



vol.25
1からの学生生活
坂田栞・上田将迪・中野海地
(関西学院大学 石淵順也ゼミ
チームSUN)



vol.26
1からの学生生活
松原悠・佐藤あゆみ・井上恵夢
(一橋大学 松井剛ゼミ)



vol.27
第2回碩学舎賞一席
「デザインと技術：
製品の意味の革新に対する技術の貢献」
後藤智



vol.28
第2回碩学舎賞二席
「既存事業の成長と顧客資源の活用」
渡辺紗理菜



vol.29
第2回碩学舎賞二席
「『古楽』市場の生成過程における
音楽学研究と演奏実践の協働」
飯島聡太郎



vol.30
1からの学生生活：大学生活×きっかけ
小澤修平・鎌田浩平・小林悠一
(首都大学東京 水越康介ゼミ)



vol.31
＜閉ざされた社会＞と
＜開かれた社会＞-変化の認識論
小坂井敏晶

SBJ-碩学舎ビジネス・ジャーナル- vol.31 (2014年12月17日発行)

『<閉ざされた社会>と<開かれた社会>—変化の認識論』

小坂井 敏晶(パリ第八大学 心理学部 准教授)

Online edition : ISSN 2187-0845

碩学舎の会員になりませんか？

碩学舎の教員会員ページでは、大学・専門学校の教員の方へ向けて「1からシリーズテキスト」を使った講義に役立つ資料や情報をお届けしています。

※教員会員ページにはログインが必要です。教員会員資格は、大学・専門学校の教員および博士課程の大学院生の方に限ります。

株式会社 **碩学舎**
Sekigakusha

〒101-0052
東京都千代田区神田小川町2-1 木村ビル10F
フリーダイヤル 0120-778-079

碩学舎公式サイト
<http://www.sekigakusha.com>
Facebook
<https://www.facebook.com/sekigakusha>